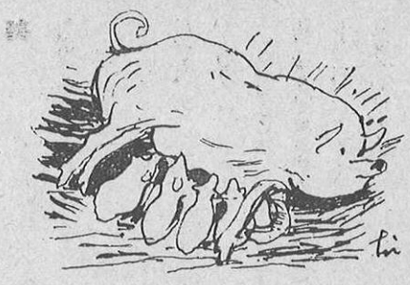
郷土の産業

伸展きざす……★芦北の畜産



温泉郷〃日奈久〃を過ぎ、鹿児島本線を南へと下りつづけると、九州縦断のヘソとまで云われた赤松、佐敷、そして津奈木の三ツの太郎峠が、間口の広い芦北郡の玄関に横たわつている。そのまん中あたりを帯状に形をすぼめたさゝやかな平野の中を佐敷川の流れが糸を引き、そこに芦北町佐敷の屋根々々が浮かんで見えてくる……。

ブタの人工授精講習会
——品種改良の時代へ——

こゝ芦北県事務所の会議室では、ちようど、「豚家畜人工授精講習会」が開かれているところでした。養豚の研究に燃えその良きリーダを志す四十数名の受講者は、本田講師(県畜産課衛生係長)の解剖図解の説明を聴きながら、熱心にノートをとつています。ブタの講習会といつても、それが県内では、種畜場と天草の二箇所だけでしか行われていない「人工授精」の問題であるだけに、その基礎学的な「解剖、胎生遺伝、精子生理、器具機械、人工授精、精液検査、発情鑑定、改良と登録、繁殖生理、種付の理論」など、極めて専門的な科目と取り組んだ余念の入らぬ真剣さです。県下各地から集つた講習生の六・七割は、実際に養豚飼育の経験を踏む人々、中でも、地元芦北の参加者が多いことは云うまでもありません。

近代産業への招き

では、この辺で、目下上り坂にある養豚を中心に、畜産芦北の姿を捉えてみましよう。

先づ、畜産の分布概況を眺めてみますと、山間東南部の大野、久木野地区には和牛が三千頭、次いで鉄道の沿線には、ホルスタイン種と呼ばれる乳牛が二百五十頭、さらに西の海岸線には、白豚が四千ないし五千頭と、さかんなひろがりをみせています。

ところで、この芦北の畜産も、戦争の痛手から立上つて、県の第一次、第二次の産業振興計画からただいまの計画建設への段階を辿りながら、ハツキリとした推移をみせて今日に及んでいます。

すなはち、二十二年から二十五年の第一次産振計画では、「生産量の増加」をモットーに、和牛が戦前の十数倍を上廻る三千頭に達し、また、乳牛が僅かながらも五頭から十七頭に、馬が六十頭から千頭へと、そして殆ど皆無といわれた白豚が、一躍六百頭へと跳ね上つたのです。続く二六年から三〇年に至る第二次産振では、「農工併進」の線に沿つて、畜産の在り方にも大きな方向転換が迫られて来、これ迄の生産本位から品種改良に、そして又、役畜に供されてきた和牛や馬などの振興を、近代産業と結びついた酪農や養豚に、その重点が移されてきたのです。

確保しよう、乳牛飼料
——これが酪農発展のカギ——

では、これから、芦北の重点産業の一つとして大きなウェイトをかけた畜産の扉を、まづ酪農の面から開けてみましよう。

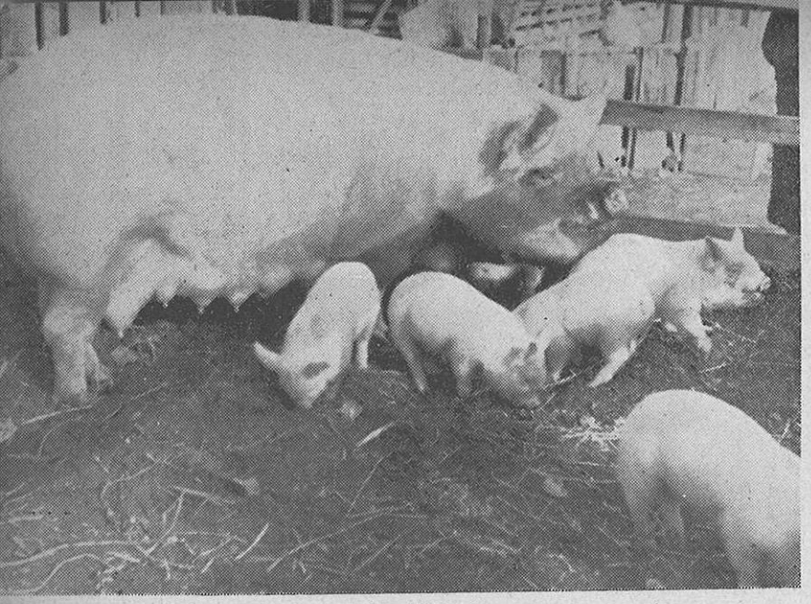
球磨地域が、阿蘇山麓と一緒に国の集約酪農地域に指定されてからすでに三年。その球磨地域に含まれた芦北の酪農が、次第にその実績を上げてまいり、乳牛の数も本年度中には三百頭まで達成できると太鼓判を押しています。

乳牛の飼育が、土地耕作と結びついていわゆる〃酪農〃の形の農業に発展してきたことは、その廐肥の必要性や地力の増大と共に、一方では、近来の乳業資本の拡大に導かれた、農家の現金収入源を図るためでもあつたのです。

水俣に在る「芦北酪農業協同組合」はその支部である田浦、佐敷、大野、湯浦津奈木の各地区と水光社ほか五つの処理場から集る牛乳を集荷して、市乳(飲用牛乳)四石、原料乳(森永ミルクなどの乳製品加工)四石、計八石を日産として県内外へ出荷しています。これら牛乳一合当りの出荷値段は、プール計算と称する利潤共同計算制を採つており、夏乳が六円、冬乳が四円五十銭から五円までとあつて、その実績は月二十万円位に達しているそうです。以上のように、この組合は、協同組合法に基いた生産者協同組合として、購売、販売へと大へんな力を注いでいるほか、乳牛登録権や市場開催権というのを持つて、乳牛の品種改良を目的とした等級の判別決定や市場の開催を適宜に行つて、酪農振興発展につくしています。

ところで、当地の酪農には、水稲の早期栽培に関聯した、一つの問題を含んでいるのです。それは、現在九十二町歩について実施している水稲早栽を、三十三年度には、六百五十町歩へと飛躍的に発展させることは好いにしても、果して、乳牛の自給飼料を充分に得るための後作(裏作)が期待どおりにゆくかどうかが心配されているのです。つまり、その成否如何が、乳牛の増加、ひいては酪農の伸長に大きくひびいてくるからです。まだ、芦北の酪農が過渡的な段階であるために、それに対する農家の認識や経験も十分ではなく、従つて、なおいつそうの研究が必要なのです。

そのような現況から判断して、家畜保健衛生所や関係機関の酪農家に対する指導と努力とが期待されるわけです。



芦北郡には四千ないし五千頭の豚がいる……★

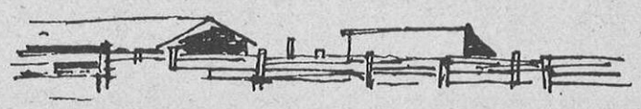
評判の良い〃芦北のブタ〃
——だが、か弱い経営基盤——

次に、本年度の生産量をすでにオーバアしたと云われる養豚について、現場の状況から診断してみましよう。

牛馬が大家畜と呼ばれるならば、さしずめ豚は、「細羊、山羊などと共に中家畜と申せましよう。豚の飼育が、主として海岸地帯の半農半漁村に片寄つていることは、天草郡牛深市などの例にもれず、それが、沿岸漁業不振の打開策として昂つてきたことを如実に示しています。元来、豚は雑食性の動物とあつて、雑漁を中心にした低廉な飼料が得られる海岸地方に養豚が目立つのも、一つの道理として肯けられるわけです。安いと云つても、生後半年で売る小豚一頭には、原価計算をすれば、五百円から千円内外の飼料代が要るのだそうで、こゝの海岸地方で飼つている親豚の数は、せいぜい一戸当り一、五頭というところが、その平均だそうです。

現在、家畜衛生保健所で行つている豚コレラの予防接種では、その実数が三千頭余りと云うことですが、実際は、少くとも四千ないし五千頭位が確実で、たゞ豚の売買移動が非常に激しいために、その把握が出来ずにいるわけです。つまり、豚の出産は通常年に二回、そして生れる数が親豚一頭について、五、六頭から十二、三頭とさまざまであり、これが生後半年位までの間に、庭先売買などによつて消えてゆくのが実情です。

豚の飼育は、何と云つても、水俣市が全体の七割を占めており、このことから肉の加工処理や大量の消費都市に、その条件の良いことが判ります。しかし、芦北郡の人口や農家戸数が県下各郡と較べて最も低い上に、総面積が僅か、その一割にも及ばない状態であれば、米中心の農家経営の余力で豚の飼育を図ることは飼料の自給度の面からみても無理があり、又そのための農協借入資金の枠から考えても困難を伴うものと考えられます。然しながらなおも農協自体の養豚部門に対する積極的な働きかけは、欠くことのできない事業の一つではあるのです。

もつとも芦北の現状から申しますと、現在、大家畜に相当な力コブを入れている畜産農協を、さらに、これら中家畜にも広く及ぼすことによつて、有畜農家全般に対する経営基盤を強化してゆくことも、現実の問題として手近な方法だと云えましよう。

さて、豚はもともと屠場法などの基本法によつて、飼育者自体が勝手に屠殺し自家消費することは、かたく禁じられていますから、豚の売買にはまづ小豚の競市が開かれます。これは、水俣市では月二回、佐敷地区では隔月に開かれて、買手がつけば早速貨車の中のお客となつて、県内では主に八代、熊本に降ろされ、遠くは関東地方にまで送られてゆきます。このところ、東京方面でも「芦北の